

完全1因子分解から誘導される Dudeney 集合について (II)

小林みどり, 喜安善市, 林田 侃

Dudeney sets induced from perfect 1-factorizations (II)

Midori KOBAYASHI, KIYASU-Zen'iti and Tsuyoshi HAYASHIDA

Abstract

A set of Hamilton cycles in the complete graph on n vertices is called a Dudeney set, if every path of length two lies on exactly one of the cycles. It has been conjectured that there is a Dudeney set for every complete graph, but it is still unsettled. Furthermore, little is known about the number of non-isomorphic Dudeney sets.

In the previous paper, we constructed two types of new Dudeney sets using perfect 1-factorizations and determined the numbers of these Dudeney sets.

In this paper, we show Dudeney sets of these types are not isomorphic, so the number of them are determined.

$K_n = (V_n, E_n)$ を n 個の頂点をもつ完全グラフとする. $n = p + 1$, $r = (p - 1)/2$ とおく. ここで, p は奇素数, ≥ 7 である.

任意の 2-path (長さ 2 の path) をちょうど 1 回ずつ含むような Hamilton 閉路の集合を K_n の Dudeney 集合という. $V_n = \{\infty\} \cup GF(p) = \{\infty\} \cup \{0, 1, 2, \dots, p-1\}$ とおき, 1 因子 F_i ($0 \leq i \leq p-1$) を $F_i = \{\{\infty, i\}\} \cup \{\{a, b\} \in E_n \mid a, b \neq \infty, a+b \equiv 2i \pmod{p}\}$ と定義すると, $\mathcal{F} = \{F_i \mid 0 \leq i \leq p-1\}$ は K_n の完全 1 因子分解であり, $\mathcal{D} = \{F_i \cup F_j \mid 0 \leq i < j \leq p-1\}$ は K_n の Dudeney 集合である.

[1] では, \mathcal{D} を変形することにより, 2 種類 (I 型と II 型) の Dudeney 集合を構成し, I 型と II 型の Dudeney 集合の個数をそれぞれ決定した. この論文では, I 型と II 型の Dudeney 集合は非同型であることを証明する. それによって, I 型と II 型を合わせた Dudeney 集合の個数が決定される.

\mathcal{D} を次のように分解する.

$$\begin{aligned}\mathcal{D} &= \mathcal{D}_0 \cup \mathcal{D}_0^c \\ \mathcal{D}_0 &= \{F_0 \cup F_i \mid 1 \leq i \leq p-1\} \\ \mathcal{D}_0^c &= \{F_i \cup F_j \mid 1 \leq i < j \leq p-1\}\end{aligned}$$

$R = \{\rho: V_n \rightarrow V_n \text{ 全単射} \mid \rho F_0 = F_0\}$ とおき, $\rho \in R$ について $\mathcal{D}(\rho) = \rho \mathcal{D}_0 \cup \mathcal{D}_0^c$ と定義すると, $\mathcal{D}(\rho)$ は Dudeney 集合となる. これは I 型 Dudeney 集合と呼ばれる [1].

次に, 素数 p が $p \equiv 3 \pmod{4}$ で, $\langle 2 \rangle$ の $GF(p)^*$ における指数が 2 であるとする. そのとき, $\langle 2 \rangle = \{1, 2, 4, 8, \dots\} \subset GF(p)^*$ は $\text{mod } p$ の half-set であるから,

$$F_0 \cup F_1, F_0 \cup F_2, F_0 \cup F_4, F_0 \cup F_8, \dots$$

を回転させることにより前述の Dudeney 集合 \mathcal{D} が得られる. すなわち τ_a を V_n の置換で

$$\tau_a(y) = \begin{cases} y + a & (y \in GF(p)) \\ \infty & (y = \infty) \end{cases}$$

と定義し, $\mathcal{B}_0 = \{F_0 \cup F_i \mid i \in \langle 2 \rangle\}$, $\mathcal{B}_1 = \tau_1 \mathcal{B}_0$, $\mathcal{B}_2 = \tau_2 \mathcal{B}_0$, \dots , $\mathcal{B}_{p-1} = \tau_{p-1} \mathcal{B}_0$ とおくと, $\mathcal{D} = \mathcal{B}_0 \cup \mathcal{B}_1 \cup \dots \cup \mathcal{B}_{p-1}$ である.

頂点の置換 $\rho_{\infty i}$ ($0 \leq i \leq p-1$) を $\rho_{\infty i} = (\infty \ i)$ と定義する. $\{0, 1, \dots, p-1\}$ の任意の部分集合 I に対して,

$$\mathcal{D}(I) = (\cup_{i \in I} \rho_{\infty i} \mathcal{B}_i) \cup (\cup_{i \notin I} \mathcal{B}_i)$$

と定義すると $\mathcal{D}(I)$ は Dudeney 集合となる. これは II 型 Dudeney 集合と呼ばれる.

Dudeney 集合は Hamilton 閉路の集合であり, Hamilton 閉路は 2 つの 1 因子に分解できる. I 型 Dudeney 集合と II 型 Dudeney 集合が非同型であることを証明するために, それらの Dudeney 集合に属する 1 因子の種類と個数に注目する.

補題 1 I 型 Dudeney 集合 $\mathcal{D}(\rho)$ ($\rho \neq id$) に属する 1 因子について次が成り立つ.

- (1) F_0 はちょうど $p-1$ 個ある.
- (2) F_i は $p-2$ 個以上ある. ($1 \leq i \leq p-1$)
- (3) ρF_i は 1 個以上ある. ただし $\rho F_i \neq F_0$. ($1 \leq i \leq p-1$)

II 型 Dudeney 集合 $\mathcal{D}(I)$ において, 1 因子 $\rho_{\infty i} F_k$ (ただし $i \in I$, $F_i \cup \rho_{\infty i} F_k \in \rho_{\infty i} \mathcal{B}_i$) は全て異なることより, 次の補題が成り立つ. $|I| = t$ とおく.

補題 2 $\mathcal{D}(I)$ にちょうど 1 個属している 1 因子はちょうど rt 個ある.

補題 3 $\mathcal{D}(\{0\}) = \rho_{\infty 0} \mathcal{B}_0 \cup \mathcal{B}_1 \cup \mathcal{B}_2 \cup \dots \cup \mathcal{B}_{p-1}$ に属する 1 因子について次が成り立つ.

- (1) F_0 はちょうど $p-1$ 個ある.
- (2) F_i はちょうど $p-2$ 個ある. ($1 \leq i \leq p-1$, $i \in \langle 2 \rangle$)
- (3) $\rho_{\infty 0} F_i$ はちょうど 1 個ある. ($1 \leq i \leq p-1$, $i \in \langle 2 \rangle$)
- (4) F_i はちょうど $p-1$ 個ある. ($1 \leq i \leq p-1$, $i \notin \langle 2 \rangle$)

これらの補題をもとに, I 型と II 型の Dudeney 集合が, \mathcal{D} を除き非同型であることを示す.

定理 $\rho \neq id$, $I \neq \emptyset$ ならば, $\mathcal{D}(\rho) \not\cong \mathcal{D}(I)$ である.

証明 $\mathcal{D}(\rho) \cong \mathcal{D}(I)$ であると仮定し, 同型対応を与える頂点の置換を Y とおく. $Y: \mathcal{D}(\rho) \rightarrow \mathcal{D}(I)$.

$\mathcal{D}(I)$ に属する 1 因子のうち, 1 個しか現れない 1 因子は rt 個あり (補題 2), それらは F_i ($i \in I$) との union の形で $\mathcal{D}(I)$ に含まれている. しかし, $\mathcal{D}(\rho)$ に属する 1 因子のうち, 1 個しか現れない 1 因子は全て F_0 との union となっている. よって $|I| = t = 1$ でなければな

らない. $I = \{i_1\}$ とする. $\mathcal{D}(\{i_1\})$ と $\mathcal{D}(\{0\})$ は同型であるので, 以下, $\mathcal{D}(\rho) \cong \mathcal{D}(\{0\})$ として矛盾を導く.

$\mathcal{D}(\rho)$ の ρF_i ($1 \leq i \leq p-1$) は形式上 1 個ずつあるが, $\mathcal{D}(\{0\})$ と同型であるから, そのうちの r 個は 1 個ずつで, 残りの r 個は $p-1$ 個ずつあることになる. よって補題 3 より,

$$Y(\{\rho F_i \mid 1 \leq i \leq p-1\}) = \{\rho_{\infty 0} F_i \mid i \in \langle 2 \rangle\} \cup \{F_i \mid i \notin \langle 2 \rangle\}$$

である.

$\{F_i \mid 1 \leq i \leq p-1\}$ は完全1因子分解の部分集合であるから, $\{\rho F_i \mid 1 \leq i \leq p-1\}$ のどの 2 つの 1 因子も Hamilton 閉路を作る.

$\rho_{\infty 0} F_1 \cup F_{-1}$ を考える. (2 の $GF(p)^*$ における位数が $(p-1)/2$ であることから, 2 は $GF(p)^*$ において平方剰余である. $p \equiv 3 \pmod{4}$ という仮定から -1 は平方剰余ではない. よって, $-1 \notin \langle 2 \rangle$.)

$$\rho_{\infty 0} F_1 = \{\{\infty, 2\}, \{0, 1\}\} \cup \{\{a, b\} \mid a + b \equiv 2 \pmod{p}, a, b \neq 0, 1, 2\}$$

$$F_{-1} = \{\{\infty, -1\}\} \cup \{\{a, b\} \mid a + b \equiv -2 \pmod{p}, a, b \neq -1\}$$

より, $\rho_{\infty 0} F_1 \cup F_{-1}$ は $(0, 1, -3, 5, -7, \dots, 8, -6, 4, -2)$ と $(\infty, 2, -4, 6, -8, \dots, 7, -5, 3, -1)$ の 2 個の $n/2$ -cycle に分かれ, Hamilton 閉路とならない. 矛盾. よって定理が成り立つ.

$\mathcal{D}(\rho)$ と $\mathcal{D}(I)$ の個数 $N_I(n)$, $N_{II}(n)$ は [1] で求められているので, I 型と II 型をあわせた Dudeney 集合の個数 $N(n)$ は, 上の定理より

$$N(n) = N_I(n) + N_{II}(n) - 1$$

であることがわかる. たとえば, $N(8) = 16 + 12 - 1 = 27$, $N(24) = 4391507800 + 33164 - 1 = 4391540963$ などである.

参考文献

- [1] 小林, 喜安: 完全1因子分解から誘導されるDudeney集合について, 経営と情報 8 (1996) 13 - 32.